

杉原千畝氏の唯一存命の四男 杉原伸生氏 「僕のオヤジ、チウネ」

杉原伸生です。皆さん、初めてお目にかかりますけれども、昨日、実は、この施設をのぞき見して、全部、読ませていただきました。そして、関係者の方々のすばらしい仕事、この顕彰施設、杉原千畝、センポ・スギハラ・メモリアルですか、今、他の施設ですか、まあ、他の県、隣ですとか、リトアニア・カウナス、同じようなメモリアル、作ってあるのですけれども、ここが一番です。断トツです。100点満点とすると、97点です。どうして、3点取られたかといいますと、このセンポという名前ですね。これは本来、映画なんかで使われていますけれども、千畝がユダヤ人にセンポと呼んでくれと言ったというんですけれども、そういうことはまったくない話でありまして、1960年、千畝が日本の会社のモスクワ駐在員として職を見つけてきて、モスクワに駐在する場合にビザを取らないといけないのです。その時に昔、ハルビン時代にソ連と交渉して、北満、北満州鉄道をもものすごく安く、買い上げたことがある。その恨みを買って、千畝はペルソナ・ノン・グラータと呼ばれて、ソ連から、何て言うのですかね、弾かれたというか、外務省で一度、モスクワ就任の外交官の任務を命じられるのですが、ソ連に入国を拒否されたのですね。その鉄道の交渉で、ソ連がかなり、損を被ったので、杉原千畝というのは、もう、ソ連に入れるなということなのです。とんでもない奴だと。それで、千畝が1960年、ソ連に行くときに、ビザを申請するときに、名前を変えようと、そうして、杉原千畝ではなくて、「センポ」と読めますから、日本のパスポートの申請に「センポ」と書いた。「センポ・スギハラ」、最初は「センポ・スギワラ」と書いたのですね。というのは、モスクワに着いたときに、入国審査で拒否されてはかなわないから、それで使った名前が、センポであって、それが昔の1940年代のカウナスでビザを発行したときに、使われたというのは、まったくのウソです。これは本ですとか、映画ですとか、面白半分にそういうことを言ったわけで、当時の外交官に対して、個人名で呼んでくれなんてことは、決してないのですね。もちろん、ミスタースギハラ、あるいはコンスル・スギハラと呼ぶのが当然なのです。

まあ、そういうことで、このセンポ・メモリアルは3点減点です。でも、素晴らしいです。素晴らしい顕彰施設です、これは。その杉原リストの作り方も陶器の上にユダヤ人難民の名前、2139人ですか、焼き付けてありますし、これは、何十年、何百年たっても消えないものです。ユダヤ人の子孫、サバイバーの子孫が、今、何十万人というそうなのですけれども、その人たちの家族が来ても、み

んな自分たちの先祖の名前を探して、きっと喜ぶことだと思います。まあ、その3点はいつでも返せますから、皆さん、頑張ってくださいればいいと思いますけれども。

父の話、親父なのですからけれども、僕にとって言えば、親父で、決して、怖い親父でもないし、どっちかという、甘やかされて育った自分ですから、親父の思い出というのは、楽しい思い出、まあ、苦しい思い出というのは忘れますから、楽しい思い出が残るわけですね。

僕が生まれたのは、戦後、千畝と幸子、子供3人、戦後、2年経ってから、日本に戻ってきました。どうして2年経ってから戻ってきたのかというのは、まだ、はっきりわからないのですけれども、どういうわけか、帰国を遅らされていました。これはまあ、これから調べればわかるわけで、いろいろな発見があるかと思っています。

帰ってきて、外務省に呼ばれて、例の件で辞めてもらうよと言われて、親父も、例の件って、何ですかとは、わざわざ聞かないのですね。何でそんなこと言って、自分が国のためにやったと思う仕事を、他人、他人というか、僕が帰ってきて、何にも云わずに辞めろ、じゃあ、辞めてやるよという感じでさっさと外務省を出てきたのです。まあ、そういう人間なのですね。いちいち、理屈を聞かない、それじゃあ、辞めてやるということで、その後、神奈川県藤沢市に住んでいたのですけれども、そこで、雑貨店を始めて、小さな雑貨店ですね、これは、そのときの借家の前です。鵜沼に家を借りて住んでいまして、ボロボロの家です。僕はまだ、生まれて1年くらいだと思いますけれども、カメラを撮る人が、一番上の兄だと思うのですけれども、ほら、レンズを見てごらん、ハトが出てくるよと、笑いなさいと、それで笑っているのですよ。右の方は、2番目の兄でブスツとしていますね。そんなハトが出て来るわけがないだろうと。まあ、こういうところに住んで、非常に、戦後すぐは誰でもそうですけれども、非常に貧しい暮らしで苦しかったと思うのです。

その後に、雑貨店を借りまして、もう役人勤めはいやになったと、自分で商売して、気軽に暮らしていこうと、簡単なアイデアなのですからけれども。

小さな雑貨店をやるのですけれども、何を売ってと言っても、消しゴム、帳面、それから、女性の化粧品、あとは草履、足袋、そういうものを地方で売るのでですね。それとか、電球ですとか。

親父の考えでは、そのころ、物資が非常に少なかったもので、店がないし、お百姓さんの家を回れば、売れて儲かるのではないかと、それで、風呂敷に包んで、

毎日、お百姓さんの家を点々と売ろうと思って、歩いていたのですけれども、僕の親父っていうのは、口下手でお世辞が言えないのですね。どこかに家に入り込んでも、愛想も悪いし、向こうは押し売りが来たと思うのですね。ごつい体をした人が入ってきたりするから、風呂敷を開けて、これどうですか、安いですよとか、そんなこと言ったら、追っ払われてしまうのです。

ですから、なかなか、その商売もうまくいかずに、そのあとは、いろいろな商売を、商売というより仕事を探しまして、傍ら、東京の科学技術庁ですとか、そういうところで翻訳の仕事だとか、それとか、進駐軍といいますけど、米軍が入ってしまして、そのときのデパート、そこのマネージャーをしたり、なかなか続かないわけですね。

それで、僕も少し大きくなってから、5歳か6歳の頃ですか、毎日、家にいるとうるさいので、母親がどっか連れて行ってってくれと、それで、親父が東京に雑貨を仕入れにいくときに付いていくわけです。東京と言っても、上野界隈、上野、神田、秋葉原というところを朝から夕方まで歩いて仕入れをするのですね。ゴムですとか、ボタンですとか、そういうものを1個ずつ買い漁るといふか、1個1個買って、それで店で売れるようにする。まあ、子供ですから、朝から晩まで歩いていると疲れるので、どこかお茶でも飲めないかなとか、ラーメンでも食べさせてくれないかなとか、言うのですけど、そんなものは家へ帰ってから食べればいいのだと、非常に儉約家で、早く言えばケチなのです。

そういう思い出がありますけれども、それが10年くらい経ちますと、僕が10歳の頃ですね、1960年、先ほど言いました、モスクワ駐在の仕事が回ってきたのです。それが元々、千畝のロシア語というのは堪能でしたから、日本の商社に頼まれて、ソ連貿易を今度やりたいから、モスクワへ駐在してくれということで行きました。

それで、毎年、一度は、東京に戻ってきて、会社で打ちあわせとかがあるのですけれども、何年か経ちまして、1968年、イスラエル大使館から家に電話がありまして、ちょっと、参事官が新しく来たので会ってくれないかと。何でかわからないので、親父は僕を連れて、イスラエル大使館へ行きました。そうしますと、そこに経済参事官という肩書をもったイスラエルの外交官がいらっしやいまして、その人が昔の書類を見せて、これはあなたに貰ったビザです、自分が若いとき、これはあなたに発給してもらったのです。これで私の命が助かったのです。僕もそういう話は全然聞いていなかったのです。外交官をやっていたと聞いていましたけれども、外交官って何かと、保険の外交を外国でやっていたのかな

と考えていましたけれども、外交官というのは、一応、日本政府の代表として、各国に派遣されている人間なのです。ですから、ユダヤ人を助けたと初めて聞いた、その1968年に、親父にも聞いたのです、何したのと。ユダヤ人とかポーランド人、そのときはユダヤ人とは言いませんでした、国籍はポーランド人ですけれども、ユダヤ人、これは人種ではなくて、その宗教がユダヤ教の人、そして、国籍はポーランド人が逃げてきて、ビザというのは、そのころは、ポーランドはドイツとソ連と分割したあとで、どちらに入っても、ユダヤ人にとっては、非常に危険な体制なのです。

それで、リトアニアという国は、ポーランドの東部にあるのですけれども、そこまで逃げてきて、次に行くところがないわけです。そこで、シベリア経由で日本に着ければ、そのあと、何とかなるだろうと思った人がいるわけです。

たまたま、そのうちの3分の1くらいですか、その人達がキュラソービザという、キュラソーに行かなくても、ビザを必要としない、キュラソービザという、ただ一筆書いてあるだけです、スタンプでね、キュラソーに行く人にはビザは必要ありませんという、それをオランダの領事が発行していたのです。ですから、そういうものがあるのだったら、第三国の入国ビザがあるのだったら、通過ビザを出してあげましょうと、それで書き始めたのが、10枚、20枚、そのうちに100枚、200枚と増えていったわけです。

僕も初めて、その1968年、イスラエル大使館に呼ばれていったときに、そういう話を聞いて、ああ、そうなのかと。でも、親父がそのニシュリ参事官とそのときのイスラエル大使のバルトゥール氏ですね、それで、バルトゥールさんとニシュリさんがうちの親父に何かしてあげることができますかと、それで、うちの親父が、ここに出来の悪い息子がいるので、イスラエルに留学させてくれないかと、そう頼んだのですね。そうしましたら、そのあと、1週間くらいで、電話がかかってきまして、もう全部準備できたと、すぐにスーツケースをもって、イスラエルへ行くようにと。で、僕はイスラエルの首都エルサレム、そこのヘブライ大学というところに準備コースがあるのですね。外人のための準備コース、それに入るように手筈を整えてもらいました。ただ、僕はそのころ、英語は、読み書きはできても、喋りは全然わからない。聞いてもわからない。そこで飛び込んで行ったのですけれども、イスラエルという国は、移民が多くて、というよりも、ユダヤ人でイスラエルに戻ってくる、もう何百年、一千年以上、もうイスラエルを離れて、ヨーロッパですとか、アメリカ、南米、オーストラリア、南アフリカ、そこまでたどり着いているユダヤ人がいるのですけれども、戻ってくる人間

が非常に多くて、みんな、言葉は、ヘブライ語の知識はあるのですが、でも、喋れない、そういう人が多いので、特別な学校、ヘブライ語学校が町にあるのです。どこの町にもあるのです。そこに入りますと、ヘブライ語というのは、昔からある言葉で、5000何百年も続いた言葉で、生きている言葉ではなかったですね。聖書というのはヘブライ語で書いてありますけれども、そのヘブライ語を勉強する、これは、みんな、スタートはゼロなのです。英語を知っている、フランス語を知っている、ロシア語を知っている、いちいち訳さない。もう、みんなヘブライ語でしゃべり出す。先生が、最初の1週間は何か言っていますけれども、全然わからないです。そのうちに1週間が経つと大体、こういうことを言っているのかと、掴めてくる。そして、2週間、3週間経つと、文字が読める、文字が書ける。4週間経つと、新聞が読めるのです。そういう教育方法が非常に徹底してまして、イスラエルに行った人、ユダヤ人に限らず、何人でも、ヘブライ語というのは、早くマスターできます。まあ、マスターと言っても、日常会話ですね。1か月すれば、日常会話には不自由しないです。

そういうことで、僕はイスラエルで勉強しまして、そのあと、ダイヤモンドのお仕事を始めるというか、イスラエルの会社に勤めまして、イスラエルには大体、20年近くおりましたけれども、1年に1回は帰っていましたし、その間、3年間、日本の会社で修行もしています。

そして、1978年です。うちの親父がモスクワをもう引退して日本に帰ってくる、日本に帰ってきて、毎月、日本に帰って、親父のところに顔を出すのですけれども、先ほど、千弘が言ったように新聞を毎朝、全部、読んでいますね。ですから、世界の情勢はものすごく詳しく、知っていますから、知っていることを全部喋ってくれるのですよ。朝から晩まで。それだけ、研究、それから、知りたがる、物を勉強することが好きなのです。何でも勉強する。知らない分野でも、知識を持っている。研究心が強いというか、ですから、78、80歳、そのあと、体を悪くして、心臓を悪くして、その心臓を悪くする理由はいろいろあったのですけれども、かなり、体力も劣ってきて、散歩もできない状態、寝たきりの状態になるのです。親父にしてみれば、僕のところに、イスラエルとヨーロッパに住んでいましたけれども、僕のところにきて、余生を過ごしたいと言ってきたのですけれども、医者の方から、心臓が悪いので、飛行機に乗ることは諦めなさいと、まあ、我慢して、86歳、1986年に亡くなりました。

親父の人生って、何だったのか。お金も作れなかった、何にもなかった、家もなくなった、しかし、こうやって、今、皆さんに、思い出していただいて、杉原

千畝という人間がいたのだなと、なんかしたのだなと。決して偉業ではないのです。ヒーローではないのです。ただ、自分の信念というものがあまして、親父に聞いたことがあるのです、何でユダヤ人を助けたのかと。だって、追い返したって、可哀そうだもん。その一言なのですね、可哀そうだもん。それは人間への愛情だと思います。

この瑞陵高校の中学生、高校生するとき、優等生だとか優秀だとか、そんなことはないのです。僕は2年前にここに来まして、その親父の昔の通信簿を見せてもらったのですけれども、平均55点ですよ。全然、優等生じゃない。まあ、その前の年だとか、優等生になったこともあったかもしれないですけれども、普通の学生、みんなと同じように遊んで、ここから30分くらいのところに住んでいましたけれども、その学校に来る朝の30分、学校に来るまで歩きながら、遊んでいたでしょうし、帰るときも道草をして、楽しい生活をしていたと思います。そういう親父だったと僕は思います。勉強ばかりしていたわけじゃない。何についても興味を持つことですね。自分の信念を貫く。それが僕は杉原千畝だと思います。

ユダヤ人が言うのですけれども、あの当時、1935年から40年、暗闇の世界にいたと。真っ黒な雲の間から降りてきた天使、そして人、我々を助けてくれたのが、杉原千畝だと。そういうふうに思われています。

ありがとうございました。(拍手)